

# 算命学中庸

## 【初年】 37 回目

【初年】 37 回目はこのページからです。

授業科目 に せいそうかんへんかほう  
【二星相関変化法②】 2 回目

・【初年】 37 回目【二星相関変化法②】 01

 復習 ⇒ 【初年】 36 回目 に せいそうかんへんかほう 【二星相関変化法①】 少し復習します。

40 頁  規則は《8つ》あります 7 頁から話しを進めました。

 つぎに【二星相関変化法】による星の組み合わせは〔55 種類〕ありますが〔55 種類〕を網羅するとかかなりの時間を要します。

そこで「星の組み合わせは……このように考えてゆきます」という説明をします。その考え方を理解していただければ大丈夫です。 ➡➡

そして

1 2 ⇒ わかりやすくするための番号です と記載しました。

前回 ⇒ 36回目【二星相関変化法①】の授業は 1～5 まで説明しました。

- 1 貫索星と貫索星 (41 頁から)
- 2 貫索星と石門星 (42 頁から)
- 3 貫索星と祿存星 (44 頁から)
- 4 貫索星と玉堂星 (47 頁から)
- 5 鳳閣星と龍高星 (50 頁から) ～ (70 頁まで)

星の組み合わせ 5 の授業は『通関』<sup>つうかん</sup>「七殺」<sup>ななさつ</sup>「水火の激突」<sup>すいか げきとつ</sup>について説明しました。

【初年】 37回目【二星相関変化法②】<sup>に せいそうかんへんかほう</sup> ①の続きは  
03 頁⇒ 6 鳳閣星と調舒星からです。

□ <sup>にせいそうかんへんかほう</sup>【二星相関変化法②】 2回目 略称「<sup>にせいへんかほう</sup>二星変化法②」

6 鳳閣星と調舒星

<sup>ほうかくせい</sup>〔鳳閣星〕は<sup>ようせい</sup>陽星です。 <sup>ちょうじょせい</sup>〔調舒星〕は<sup>いんせい</sup>陰星です。

星の特徴 { 鳳閣星（陽）のんびり —— 表面に出やすい  
調舒星（陰）神経質 —— 内面に出やすい

鳳閣星（陽星）のんびり……調舒星（陰星）神経質とでは、異なる質ですが、「比和」の陽と陰になっています。

「比和」で（陰星）と（陽星）の場合は、鳳閣星（陽星）のほうが『表面に出やすい』のです。

調舒星（陰星）のほうは『内面に出やすい』のです。

このことは鳳閣星と調舒星に限ったことではありません。

（陽星）（陰星）の『出方（出る様子）』は「十大主星」すべての星にいえるのです。 参考：出方〔ある事柄に対する対処のしかた。〕

(陽) と (陰) では、陽のほうが目立ちますから、表面に出やすいわけです。人体図に鳳閣星と調舒星の両星をもつ人は〔のんびり〕と〔神経質〕という両方を備えていますが、〔鳳閣星 陽〕のほうが目立ちます。

それゆえ、まわりの人が〔鳳閣星 (陽)〕をもつ人物を観たときに、鳳閣星の質 (のんびり) のほうが、際立って見えるわけです。鳳閣星のほうが印象に残ります。

調舒星の質 (神経質) は、内面に隠れてしまいます。

このことは (陰星) と (陽星) そのものがもっている異なる質です。ほかの十大主星もおなじように考えます。

人体図のなかで「比和」で (陰) と (陽) の星になっている場合には、どの十大主星であっても、陽星のほうが表面にでやすいのです。

このように考えてください。

参考：それゆえ〔それであるから。だから。〕

参考：質〔生まれつき。天性〕〔そのもの本来の性質がそのまま示されている意〕

参考：目に留まる〔見て心が引かれる〕

参考：印象〔簡単に忘れられないほど心に強く感じる〕

## 7 鳳閣星と牽牛星

鳳閣星と牽牛星……少しわかりにくいとおもいます。

りちてき  
理知的（理性や知性に富む）

おちょうしもの  
お調子者（軽はずみ、おちょこちよい）

よくいえば……理知的な人といえます。

悪くいえば……お調子者で、やることが好い加減で明確さを欠きますが、相手の気に入るように接します。

つまり、その時その時に調子を合わせて、うまく立ち回る面をもちます。

（よくいえば理知的）（悪くいえばお調子者）という意味を含んでいます。

参考：お調子者〔いい加減に調子を合わせる人〕〔おちょこちよい〕

〔調子にすぐのってしまう、軽はずみな人〕

参考：面〔事柄や事態のある部分〕

参考：理知的〔理性、知識に従って考え行動するさま〕

参考：理知〔感情などに支配されることなく、知識に基づいて物事を思考・判断〕

## 8 調舒星と龍高星

調舒星（陰）と 龍高星（陽）は「七殺」ではないのですが、  
「水火の激突」の組み合わせです。

🔍 **復習** ⇒ 36回目【二星相関変化法①】 07 頁に記載。

👉 規則は《8つ》あります。

規則《1》陽と陰の組み合わせ ⇒ 『和』が生じます

規則《2》陽と陽の組み合わせ

陰と陰の組み合わせ

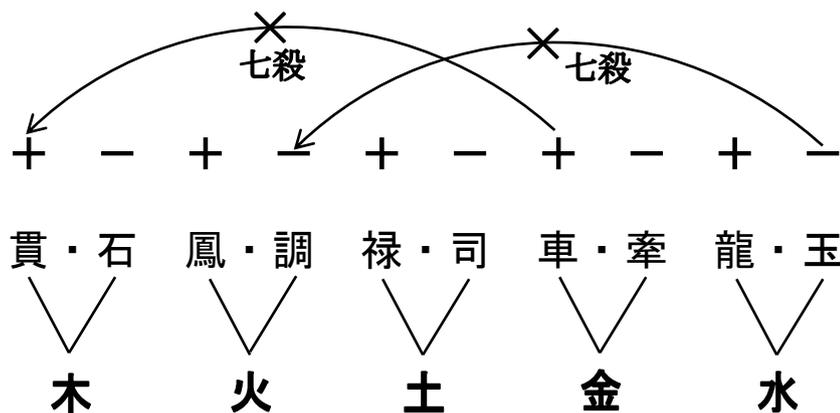
反発します

🔍 **復習**はいくつもできます。参考にしてください。

🔍 **復習** 「七殺」は（陽星）と（陽星）あるいは（陰星）と（陰星）  
の組み合わせです。

〔たとえば〕【初年】 36回目【二星相関変化法①】 34

十大主星を横書きに順番に書きます（縦書きもおなじです）。



龍高星はもともと不満が多い星ですが、調舒星もその質をもっています。

この組み合わせは“不満が多い”ということです。

不満が多い人は「文句ばかりいう人」そのような印象を思い浮かべやすいでしょう。

“なにかに不満がある”とすれば、その不満というのは（なにかを改善するため……）（なにかを改革するため……）に知恵を働かせる原動力ともいえます。

言葉を換えれば“向上心かが強い人”という意味合いにもなります。現在の状況に満足していないわけです。

向上心かがなければ……不満は噴出ふんしゅつしないでしょう。

調舒星と龍高星の組み合わせは、向上心かが強い星同士ですから“不満が多くなりやすい”という意味にもなるわけです。

龍高星には「改革かいかくの星ほし」という意味があります。

なぜ……改革したくなるのかといえは、現状に不満だから改革したくなるわけです。改革心かが強いというのは、もともと内面に不満が多いのです。

向上心かが強ければ、不満の芽めがでてきます。

「不満が多いと文句も多い」と、おもいやすいでしょう。  
しかし、悪い意味ばかりあるとはいえないのです。

不満……その裏側にさまざまな<sup>じしやう</sup>事象・<sup>い み あ い</sup>意味合いが存在していると考えられます。

人間の内面を掘り下げるわけですから、難しいのですが、  
それらのことを併せて<sup>あわ</sup>考慮してはいかがでしょう。

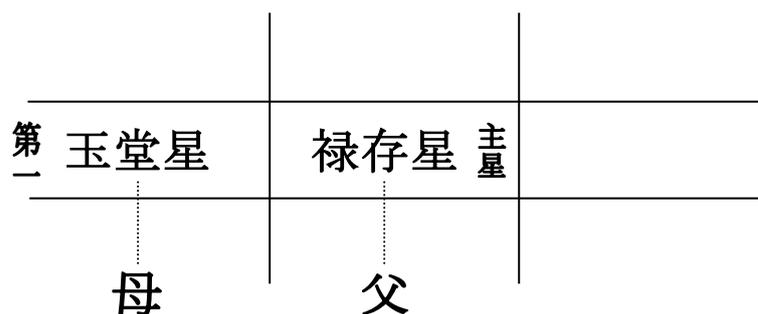
参考：事象〔ことの成り行き。ことがら。〕

参考：意味合い〔表現されたことがらの奥にある意図・原因などのありよう〕

## 9 禄存星と玉堂星

この組み合わせは、すこし特殊です。

具体的に考えましょう……。



〔たとえば〕 人体図の場所はどこでもよいですから……

玉堂星と禄存星があるとします。

人物になおすと〔玉堂星は母親の星〕〔禄存星は父親の星〕  
という意味があります。(ここでは第一命星と主星)

人物の観方はまだ勉強していませんけど……人体図に禄存星と玉堂星のある人は、父の星と母の星がそろっています。このように玉堂星と禄存星を人体図にもつ人物が、宿命どおりの生き方ができるのは、父と母の両方そろっている家庭です。

人体図には父の星と母の星の両方がそろっていますから、両親が揃っていて、両親の仲がよく温かい家庭で育つと、

この人物は自分の宿命に適合していますから、宿命どおりということになります。

両親の仲がよくて、温かい家庭に育つことが、  
この人にとっては、宿命どおりである。

そういう環境で育てば、運勢的にも、宿命と合致していますから、人間性も順調に伸びます。

つまり、人体図に禄存星と玉堂星の両方がそろっているということは、この人は（父の愛情と母の愛情）その両方を必要としています。と書かれているのです。

両親が揃っている家庭で育てば、最も順調に伸びていきます。そういう意味になります。

☞ 人体図にはそのように書かれていても、両親が揃っていない環境で育つ場合もあります。

あるいは、両親の仲が非常に悪くて、どちらかが家庭を捨てて出て行ってしまった。ということもあるでしょう。

そのような家庭で育つと、宿命そのものが活いきなくなります。宿命に合わない環境で育ってしまうからです。

〔たとえば〕英国皇室に嫁<sup>とつ</sup>いだダイアナ妃は、不幸な死に方をしたわけです。

彼女にとって母親は、自分の運勢を支えるためには必要な存在でしたが、男性と駆け落ちして家族を捨てました。

このことは彼女の人生に多大な影響を与えています。

ダイアナが生きてゆくうえで必要とされる人物がいなくなった。ということは、宿命どおりの生き方ができなくなることを意味します。

その内容については上のクラスで勉強をするとご理解できます。

それだけが因<sup>いん</sup>ではないのですが、母親が家から去ってしまったことは、ダイアナ妃の運勢を狂わせるような大きな傷跡を残したわけです。

参考：無論（言うまでもなく）

参考：因（ことの起こるもと）

## 10 車騎星と玉堂星

車騎星は行動力の星です。 玉堂星は知恵の星です。

車騎星 ⇒ 行動力の星〔軍人の星〕

玉堂星 ⇒ 知恵の星〔学者の星〕

車騎星は攻撃本能の星ですから行動力があります。

昔から“軍人の星”といわれ、軍人にも向いています。

玉堂星は知恵の星です。 なにかを研究をするとか……、  
頭をつかうのが得意な星です。

“学者の星”ともいわれています。

人体図に車騎星と玉堂星の両方をもつ人は、〔軍人の星〕  
と〔学者の星〕その両方が揃っているわけです。

言葉では「文武両道の人」といえます。

車騎星と玉堂星が揃っているわけですから、両方の星を  
活かさないといふことです。星はつかわないと腐ります。

両方の星をうごかしなさい、つかってください。

このような意味合いにもなります。

☞ 36回目【二星相関変化法①】の科目は [1] ~ [5] まで、星の組み合わせの説明をしました。

☞ 37回目【二星相関変化法②】の科目は [6] ~ [10] まで、星の組み合わせの説明をしてきました。

☞ 二星相関変化法<sup>もち</sup>を用いて人体図を観るときは、これまで説明した考え方に沿って人体図を観るとよいですね。

[55種類] すべてではなく、[10種類] の組み合わせを説明したわけです。残りの組み合わせもおなじように考えてください。

🔍 復習 36回目【二星相関変化法①】

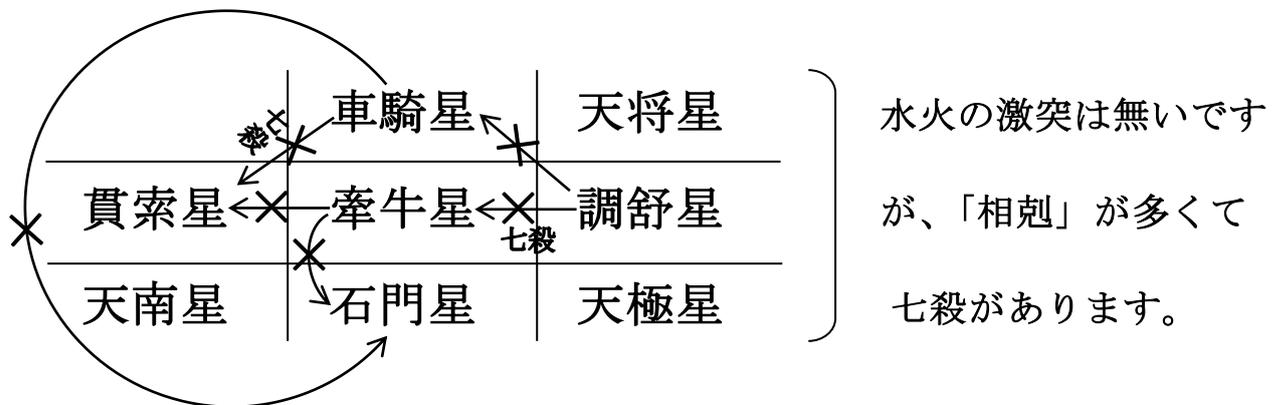
34 頁から「七殺」  
50 頁から「水火の激突」 } の説明がありました

人体図に「水火の激突」がある人は感性が鋭敏です。

鋭い感性を精神的な分野、頭脳をつかう分野、芸術の分野とか、感性を必要するさまざまな世界で発揮すると見事です。

[たとえば] アルフレッド・ヒッチコックは映画の世界です。「七殺」の人体図です。

＊ アルフレッド・ヒッチコック 1899-8-13



ヒッチコックの人体図を見ておわかりのように、相剋だらけで、「七殺」もあります。

映像で観客の感情を操作し、不安と緊張を盛り上げる独自の手法を追求して恐怖・危機を観客に感じさせました。葛藤の世界です。

🔍復習 36回目 55頁……宅間。岡村。林。佐藤。犯罪者4人の宿命を列挙しました。「水火の激突」は感性の鋭さゆえに、よい方向へ活かせないと、精神の葛藤が大きくなりすぎて、何かとんでもない事を遣らかす可能性があります。と記載しました。

⇒ 感性が鋭い質を授けられたということは、算命学的な言い方をすれば、「星に命を与えて感性を発揮して生きなさい」と、天から授けられたと考えることもできます。

知能が高い宿命の人は「知能を動かして役立てる」そのために生れた。このような意味合いにもなります。

せっかく頭がいいのに、その星をつかわないと腐ります。星をまともに活用せずに、人生を生きるようになると、「運勢がふつうの人より劣ってしまう」そうになってしまいます。与えられた宿命から外れてしまうのです。

それは人間の体とおなじで、手と足の筋力を比べると、手よりも足のほうが3倍から5倍強いといわれています。足は3倍から5倍強いので、それだけつかいなさい。そういう意味でもあるはずです。散歩したり、走ったり、健康を維持するには必要です。

健常者でありながら、座りっぱなしで、手だけを使って、足を使わない・鍛えない。そのような暮らしを、ずっと続けていたとすれば、どこか病気になります。

強いほうを……より多く使わなくてはいけないのです。

これから「頭がいいですよ」という人体図が出てきたら、  
「頭をつかいなさい」という役目を与えられている。

そのようにおもってもよいのです。

頭のよい宿命の人ほど、なにかを学ぶ必要があります。

学生であれば学業はもちろん大切です。

それに加えて、自分が求める道を勉強すればよいですね。

⇒ 人体図に〔車騎星〕〔玉堂星〕の両方もっている人は  
〔軍人の星〕と〔学者の星〕その両方があるわけですから、  
両方の星を活かしてください。

それに言葉を加えると、つぎのようによえます。

**文武**の一方が欠けると、宿命自体が伸びなくなる。

文武両道の組み合わせをもっているのですから、二つの  
星を活動させないとダメなのです。

両方の星に命を与えて「生きている星の姿にする」……  
「生き活きと役立つ星に育てる」のです。

星をつかって、躍動させて磨かないと、光輝きません。

それなのに、どちらかが欠けて、削られた生き方をすると、  
宿命から外れることになります。

そうなると、その人の宿命が伸びなくなります。

その帰結<sup>きけつ</sup>は…人間的にも成長しませんし、運勢<sup>じょうしょう</sup>も上昇しません。

人体図に〔車騎星〕〔玉堂星〕の両方をもっている子供が生まれたら、勉強と運動の両方<sup>おこな</sup>を行わせるとよいです。そうすることで、人間性も運勢も伸びてゆきます。算命学はこのような考え方をします。

参考：自体（もともとの本体。根源）

参考：伸びる（よい状態になる）

以上……「二星相関変化法<sup>にせいそうかんへんかほう</sup>」 略称「二星変化法<sup>にせいへんかほう</sup>」による星の読み方を□1～□10まで記載しました。

「二星相関変化法」における星の読み方は □1～□10 を参考にしてください。

そこで述べたこととおなじ考え方を、どの人体図でもしていくわけです。

🔍 復習はいくつもあります 参考にしてください。

🔍 復習 ⇒ 36回目 (16頁) と (26頁) に記載。

(16頁) 規則《5》「比和」についてです

規則《5》「比和」静止 ⇒ 動的・静的のいずれでもない

ただ単に、その本能が強まる。

(26頁) 規則《6》についてです

規則《6》「比和」<sup>どうせい</sup>同星〔貫索星の性質が少し加わる〕

「比和」<sup>いんよう</sup>陰陽〔石門星の性質が少し加わる〕

👉 36回目【二星相関変化法①】28頁につきの記載があります。  
上から6行目⇒人体図におなじ星がいくつもあるということは、  
おなじ性質の星ばかりが重なるわけです。

(その星の質が倍加する) (その星の性質が強固になる)

それゆえ“頑固”という質が加わります。

🔍 復習 ⇒ 36回目【二星相関変化法①】 41頁

1 貫索星と貫索星

	第四 貫索星	
		貫索星 第三

人体図に貫索星が2つある人は、〔貫索星〕と〔貫索星〕の組み合わせをもっているわけです。

〔貫索星〕の同星2つの人体図です。

貫索星が2つあるということは、頑固な星が2つありますから、“より一層頑固になる”といえるわけです。

つまり、その星がもつ意味合いが倍加して出ます。

この人体図は〔貫索星〕の同星2つですが、〔貫索星〕に限ったことではなくて、どの十大主星でもおなじです。おなじ星が複数あると……その星がもつ質の意味合いや、本能が強まる。と考えるとよいのです。

にせいそうかんへんかほう むずか  
 ☞☞ 「二星相関変化法」 ちょっと 難しい技法です。

人体図① をつかって『性格判断』の練習をします。

<b>人体図①</b>		第四命星 鳳閣星	第3従星 天恍星
第一命星 調舒星	主星 車騎星	玉堂星 第三命星	
天極星 第1従星	鳳閣星 第二命星	天馳星 第2従星	

十二大従星は算用数字で記載

人体図① で考えられる〔星の組み合わせ〕は（7つ）です。

それら（7つ）は ① ② ③ のどれかに当てはまります。

① 第二命星・鳳閣星 と 第四命星・鳳閣星は「比和同星」

「比和同星」貫索星の質がすこし加わる。

② 第二命星・鳳閣星 と 第一命星・調舒星は「比和陰陽」

「比和陰陽」石門星の質がすこし加わる。

③ 第四命星・鳳閣星 と 第一命星・調舒星は「比和陰陽」

「比和陰陽」石門星の質がすこし加わる。

🔍点線枠内を参考にするとよいですね。理解が速まるとおもいます。

規則《5》「比和」についてです 36回目【二星相関変化法①】 16頁

「比和」静止 ⇒ 動的・静的のいずれでもない。

ただ単にその本能が強まる。

規則《6》についてです ⇒ 36回目【二星相関変化法①】 26頁

参照 (26頁) {

- 規則《6》「比和」同星〔貫索星の性質が少し加わる〕
- 「比和」陰陽〔石門星の性質が少し加わる〕

人体図① に記載されている〔星の組み合わせは7つ〕です。

(1) 鳳・鳳

(2) 鳳・調

(3) 鳳・車

(4) 鳳・玉

(5) 調・車

(6) 調・玉

(7) 車・玉

まずは 人体図① に記載の (1) 鳳・鳳 を考えますと、

第二命星・鳳閣 (陽) と 第四命星・鳳閣 (陽) は ⇒ 規則《6》

「比和同星」の組み合わせですから、20頁 ① に相当します。

① 第二命星・鳳閣星 と 第四命星・鳳閣星 は「比和同星」

「比和同星」貫索星の質がすこし加わる。

『性格判断』の練習は **人体図①** と説明を参考にします。

**人体図①**

		第四命星 鳳閣星	第3従星 天恍星
第一命星	調舒星	主星 車騎星	玉堂星 第三命星
	天極星 第1従星	鳳閣星 第二命星	天馳星 第2従星

十二大従星は算用数字で記載

(1)～(7)は **人体図①** で考えられる〔星の組み合わせ〕です。

(1) **鳳・鳳** 非常にのんびりした性格と、繊細な感情が現れる。

鈍重な人生行程を歩み、時として鋭い神経を見せる。

(2) **鳳・調** おおらかなのんびりさが表面にでて、孤独性や反発心

は内面に隠れる。

(3) **鳳・車** 粗暴を消せば気品が残り、気品を消せば粗暴が残る。

すなわち、品の良さが広い交際範囲を保ち、粗暴な質が交際下手となって、自分の道を塞ぐ。

(1)～(7)は **人体図①** で考えられる〔星の組み合わせ〕です。

**(4) 鳳・玉** 感情表現と理性的表現が入り混じる。

他人事には冷静で理性的な判断を下すのに、自分の事となると感情的になり冷静さを欠く。

**(5) 調・車** 行動を起こす事が目的のようになり、時には生産的ではない行動となる。自分勝手な行動となれば、周囲の人達と遊離するし、経済的に打算抜きとなる。

**(6) 調・玉** 常識のなかの非常識となり、若年で老成風となり、博学の世間知らずとなる。精神の葛藤が激しく、精神面に強く現実に弱い。

**(7) 車・玉** 文武両道の士となる。

理性に合う行動、行動にかなう理性となり、高い人格を形成する。

**人体図 ①** に記載の十大主星を組み合わせると、(7組) できます。それらの説明も書かれています。

☞☞ まずは **(1) 鳳・鳳** の組み合わせを考えますと……

この組み合わせは「比和同星」です。

参照 (26頁) ⇒ 規則《6》「比和」同星〔貫索星の性質が少し加わる〕

そして……説明はつぎのように書かれています。

**(1) 鳳・鳳** 非常にのんびりした性格と、繊細な感情が現れる。

鈍重な人生行程を歩み、時として鋭い神経を見せる。

しかし……必ずしもこの説明とは限らないのです。

☞☞ つぎのような説明もできます。

**(1) 鳳・鳳** 鳳閣星は“<sup>おだ</sup>穏やかで自然体の星”ですが、〔鳳閣星〕

がいくつもある人体図というのは、(穏やかな鳳閣星がここにある)

(穏やかな星がここにもある) というふうになり、〔貫索星〕のもつ

“頑固さ”が少し加わります。**規則《6》**です

生来のんびりですが、鈍重とは裏腹に内面の神経は鋭敏で観察力

がありますから、なにかの物事について感じたことを、<sup>こじ</sup>固持しよ

うとする<sup>かたく</sup>頑なさをみせます。 参考：鈍重〔反応や動作がのろいこと〕

このような説明もできるわけです。つぎは **(2) 鳳・調** です➡

(2) 鳳・調 おおらかなのんびりさが表面にでて、孤独性や反発心は内面に隠れる。 22頁 人体図①の説明です。

ここで……03頁～04頁にもどります。

03～04頁 6 鳳閣星と調舒星……に書かれている同じ文章です。

鳳閣星（陽星）のんびりと神経質は異なる質ですが、比和の陰陽になっています。「比和」で（陰星）と（陽星）の場合は、鳳閣星（陽星）陽星のほうが『表面に出やすい』のです。

このことは鳳閣星と調舒星に限ったことではありません。

（陽）と（陰）では、陽のほうが目立ちますから、表面に出やすいわけです。人体図に鳳閣星と調舒星の両星をもつ人は〔のんびり〕と〔神経質〕という両方を備えています<sup>そな</sup>が、〔鳳閣星 陽〕のほうが目立ちます。それゆえ、まわり<sup>そな</sup>の人が〔鳳閣星 陽〕をもつ人物<sup>み</sup>を観たときに、鳳閣星の質（のんびり）のほうが、際立<sup>きわだ</sup>って見えるわけです。調舒星の質（神経質）は、内面に隠れてしまいます。このことは（陰星）と（陽星）そのものがもっている異なる質です。ほかの十大主星もおなじように考えます。人体図のなかで、「比和」で（陰）と（陽）の星になっている場合には、どの十大主星であっても、陽星のほうが表面にでやすいのです。このように考えてください。このように04頁に書かれています。

03～04 頁 6 鳳閣星と調舒星の説明を読むと、おなじような表現が各所にちらばって書かれています。

勉強としては大事な部分なのですが、余分な箇所とおもわれる記載の部分は省略して説明してもよいのです。

〔たとえば〕 占う側（鑑定側）が人物の性格判断をするとき、「貴方は同質の星が複数あるから、倍加された性質となりますよ」「裏側の性質も表れます」と、相談に来た人物に言っても、それが何のことだかわかりません。

占う側にとっては「裏側に隠れた性質は」大事なことですけど、相談に来た人には必要ないのです。

そういう表現は省いて、なるべく簡潔な文章にします。

〔たとえば〕 宿命が（七殺になっている）とか（相剋で陰陽だからこうなります）とか、そういった部分は省いて、簡潔な文章にしたほうがよいでしょう。

22 頁～23 頁の 人体図① に書かれている〔星の組み合わせ〕についての説明は……「余分な部分を削って、なるべく簡潔にした文章」といえるでしょう。

⇒ 22 頁～23 頁には…… (1)鳳・鳳 この組み合わせの説明が書かれています。つぎに (2)鳳・調 (3)鳳・車 の組み合わせもあって、(4)鳳・玉 もあります。

そして (5)調・車 と (6)調・玉 の組み合わせもあって、最後は (7)車・玉 という組み合わせができます。

これらは (人体図①) に書かれているありとあらゆる星の組み合わせです。すべてが書かれています。

☞ すべての組み合わせを、見落とさないように探して書き出すのは、慣れないとチョット大変かとおもいます。

人体図を「に せいそうかんへんかほう二星相関変化法」で占うときは……すべての星の組み合わせを簡条書きのように書き出して、それを観て判断することになります。

(人体図①) の説明は (参考にして頂くための文章) です。

人体図の人物が所有している性質が書かれています。

⇒ 28 頁に記載した (破線内) の説明も (人体図①) を参考にして書いた文面です。

しかし……人物像が観えてこないのです。

この書き方は『性格判断』には不向きといえます。

(1) 鳳閣と鳳閣 があるから、のんびりした性格で、繊細な感情をもつ……。

(2) 鳳閣と調舒 もあるから、のんびりは表面に出るけど、神経質は内面に隠れる……。

(3) 鳳閣と車騎 もあり、粗暴を消せば気品が残り、気品を滅すと粗暴が残り、そのどちらも出る可能性が……。

(4) 鳳閣と玉堂 感情的・理性的、両方の動きが横たわっていて、他人のことには理性的だけど、自分のことになると感情的になる……。

(5) 調舒と車騎 があるから自分勝手な行動をとると、周囲の人と遊離する。 遊離〔離れて存在すること。他から離れること。〕

(6) 調舒と玉堂 常識のなかの非常識で、心奥の葛藤が激しいけど、精神面に強い人……。

(7) 車騎と玉堂 があり、文武両道の質もそなえている……。

28 頁の [破線内] には (1) 鳳閣と鳳閣 ~ (7) 車騎と玉堂 まで  
人体図① を参考にして、[星の組み合わせ] について書かれて  
いますが……この文章では『性格判断』にならないのです。  
性質が多すぎて『どういう人物なのか』わからないのです。  
ちなみに、人物は北朝鮮の指導者です。

☞ それでは……どのように書けば良いのかです。  
ここでも 22 頁～23 頁の 人体図① を参考にします。  
人体図に載っている十大主星の [星の組み合わせ] は、  
(1)～(7)まであって説明が付記されています。  
その説明のなかから、登場人物の性格の特徴となる部分  
を見つけるのです。

星の組み合わせがもつ特徴を探すときに、おなじような  
意味をもつ説明の箇所があれば、そこは『性格の特徴』  
ということになります。

『この部分』と『この部分』は『大体おなじ意味合い』  
とおも  
と想える箇所が複数あれば、その部分が『性格の特徴』に  
なります。

参考：意味合い [いろいろな事柄を背景としてもっている表現の内容]

🔍 そこで 22 頁～23 頁の **人体図①** を見てください。

**(1) 鳳と鳳** をみると…… (のんびりした性格と繊細な感情をもつ) とあって、(のんびりは表面に出るけど、神経質は内面に隠れる) という箇所は大体おなじような意味合いといえます。

げんみつ

厳密に考えれば、もちろんチョット違います。

細かなところまで気をつけて考えれば、まったくおなじ意味合いということではないわけです。

どの組み合わせを見ても違う星なわけです。

それゆえ大体おなじような意味合いであれば、その箇所を、くくってしまって なにか **目印** をつけておきます。

**Ⓐ** と **目印** をつけることにします。

まずはそれが「1つ」です……先へ進みます。

『性格判断』の練習は **人体図①** と説明を参考にします。

【初年】 37回目【二星相関変化法②】 22

**人体図①**

	第四命星 鳳閣星	第3従星 天恍星
第一命星 調舒星	主星 車騎星	玉堂星 第三命星
天極星 第1従星	鳳閣星 第二命星	天馳星 第2従星

十二大従星は算用数字で記載

(1)～(7)は **人体図①** で考えられる〔星の組み合わせ〕です。

(1) **鳳・鳳** 非常にのんびりした性格と、繊細な感情が現れる。

鈍重な人生行程を歩み、時として鋭い神経を見せる。

(2) **鳳・調** おおらかなのんびりさが表面にでて、孤独性や反発心

は内面に隠れる。

(3) **鳳・車** 粗暴を消せば気品が残り、気品を消せば粗暴が残る。

すなわち、品の良さが広い交際範囲を保ち、粗暴な質が交際下手となって、自分の道を塞ぐ。

**人体図①** の記述にあるように……、

**(1) 鳳・鳳** 非常にのんびりした性格と、繊細な感情が現れる。

鈍重な人生行程を歩み、時として鋭い神経を見せる。

**(2) 鳳・調** おおらかなのんびりさが表面にでて、孤独性や反発心

は内面に隠れる。

このように **(2) 鳳・調** のところでも、「のんびりさが表面に出て、孤独性や反発性は内面に隠れる」とあります。

この部分は大体おなじですよね……。

厳密に考えれば、チョット違うところもありますけど、両方とも、のんびりした性格をもっているわけです。

そして、一方は、繊細でピリピリした面をもっている。というようなことを言っています。

そうしますと、このような部分で、重複している箇所が複数にわたってあれば、そこは“性格の特徴”である。

というふうにみなします。

参考：みなす〔実際はそうでないことを承知のうえで、あるものを別のあるものであると考える〕〔見たてる〕

ほかにも、細かいところは除いて大体でよいのですが、似たような意味合いを説明している部分ありますか??  
部分的でも構いませんよ。

文章そのままそっくりおなじでなくても、この部分と、この部分は、おなじようだ……それでもよいのです。

(4) 鳳・玉 感情表現と理性的表現が入り混じる。

他人事には冷静で理性的な判断を下すのに、自分の事となると感情的になり冷静さを欠く。

この箇所の (目印) を (B) とします。

【初年】 37回目【二星相関変化法②】 23

(1)～(7)は **人体図①** で考えられる〔星の組み合わせ〕です。

**(4) 鳳・玉** 感情表現と理性的表現が入り混じる。

他人事には冷静で理性的な判断を下すのに、自分の事となると感情的になり冷静さを欠く。

**(5) 調・車** 行動を起こす事が目的のようになり、時には生産的ではない行動となる。自分勝手な行動となれば、周囲の人達と遊離するし、経済的に打算抜きとなる。

**(6) 調・玉** 常識のなかの非常識となり、若年で老成風となり、博学の世間知らずとなる。精神の葛藤が激しく、精神面に強く現実に弱い。

**(7) 車・玉** 文武両道の士となる。

理性に合う行動、行動にかなう理性となり、高い人格を形成する。

そして……

**(6) 調・玉** 常識のなかの非常識となり、若年で老成風となり、  
博学の世間知らずとなる。精神の葛藤が激しく、  
精神面に強く現実に弱い。

**精神の葛藤が激しく** ここも **③** と一緒によいのではないかとおもいます。

「理性」と「感情」は反対の意味合いですが、この場合は感情的になることがありますし、内面も葛藤が大きいです。感情が激しいものをもっています。

というふうな意味合いにおいて、この部分だけ共通しているとおもえます。

あとほかには……

**(3) 鳳・車** 粗暴を消せば気品が残り、気品を消せば粗暴が残る。

すなわち、品の良さが広い交際範囲を保ち、粗暴な質が交際下手となって、自分の道を塞ぐ。

気品もあるけど、粗暴なところもあって、粗暴が出るときには、粗暴な質が交際下手となって、自分の道を塞ぐという箇所があつてと、……そして **(5) 調・車** ➡

(5) 調・車 行動を起こす事が目的のようになり、ときには生産的ではない行動となる。自分勝手な行動となれば、周囲の人達と遊離するし、経済的に打算抜きとなる。

ここにもおなじような意味のところがありまして……  
自分勝手な行動となれば、周囲の人達と遊離するし、  
この部分を © とします。

ここは (3) 鳳・車 の粗暴とほとんどおなじといえるでしょう。

(3) 鳳・車 の粗暴というのを、(4)の感情的になり冷静さを欠く。という部分とつなげてよいとおもいます。

つまり、意味としては、自分勝手な行動となれば、周囲の人達と遊離するというのと、粗暴な質が交際下手となり自ら自分の道を塞ぐ、というのは大体おなじような意味でないかと考えて、ここも © にくくりましょう。

だいたいこのくらいでよいのではとおもえますけど……。

(20～21 頁) (22～23 頁) (31 頁) (34 頁) に記載の 人体図①

を参考にしたわけですが、「まとめ方の例」とおもってください。

くくり方とかが、若干ちがっても、占い自体には、そう大した影響にはならないはずですが。



㊦「性格の特徴」をまとめます。

この人物は、のんびりした面と、おおらかな面と、孤独・反発性という両方を備えた人で、見た目はのんびり見えますけど、内面はすごくピリピリしている人物と考えられる。

これは性格の特徴の1つといえます。

そして、ときにはすごく感情的になって、冷静さを欠く事がある人で、内面の葛藤がすごく激しいです。

これも特徴です。

また、粗暴な質も出すときがあって、そういうときは、周囲と合わなくなっていて、自分勝手に粗暴な質を出して、周りの人達から離れてしまいますよ。これも特徴です。

そうしますと、

これら3つが ㊦ の大きな特徴になるのではないかと……  
と考えるわけです。

⇒ ここから **人体図②** 金正日 (キム・ジョンイル) の宿命です。

金正日 (キム・ジョンイル) の生年月日は2つあります。

Ⓐ1941-2-16    Ⓑ1942-2-16 [どちらが正しいのか不明です]

Ⓐ1941-2-16 の生年月日は「鑑定例題」で学びます。

ここでは ⇒ Ⓑ1942-2-16 で話を進めます。

ちなみに、金正日 (キム・ジョンイル) の息子が、現在の北朝鮮の指導者である金正恩 (キム・ジョンウン) です。

＊ 金正日 (キム・ジョンイル) 1942-2-16

				大運
庚 壬 壬		鳳閣星	天恍星	6 癸卯
辰 子 寅 午	調舒星	車騎星	玉堂星	16 甲辰
巳 戊	天極星	鳳閣星	天馳星	26 乙巳
丙 己				36 丙午
癸 甲 丁				56 戊申

## \* 金正日 (キム・ジョンイル) 1942-2-16 人体図②

## 人体図②

		第四命星 鳳閣星	第3従星 天恍星
第一命星	調舒星	主星 車騎星	玉堂星 第三命星
	天極星 第1従星	鳳閣星 第二命星	天馳星 第2従星

十二大従星は算用数字で記載

## 「二星相関変化法」まとめ

おおらかで、のんびりした質を外面にもつ反面、内面には繊細な感情と孤独性・反骨性をもつため、時に鋭い神経を見せる。

精神の葛藤が大変激しく、特に他人事には冷静であるが、自分の事となると感情的で冷静さを欠く。

生産的でない行動、自分勝手な行動になりやすく、その時は気品よりも粗暴な質が現れるため、周囲の人達と遊離し、自分で自分の道を塞ぐ。

博学の世間知らずとなり、都会よりも田舎生活に向く。

文武両道を鍛えることで、理性と行動が一致した高い人格を形成することができる。

人体図②の文章 (1)～(5)

(1) 鳳・鳳 非常にのんびりした性格と、繊細な感情が現れる。 ㉠

鈍重な人生行程を歩み、時として鋭い神経を見せる。

(2) 鳳・調 おおらかなのんびりさ ㉠ が表面にでて、孤独性や

反発心 ㉠ は内面に隠れる。

(3) 鳳・車 粗暴を消せば気品が残り、気品を消せば粗暴が残る。

すなわち、品の良さが広い交際範囲を保ち、粗暴な

質が交際下手となって、自分の道を塞ぐ。 ㉡

(4) 鳳・玉 感情表現 ㉢ と理性的表現が入り混じる。

他人事には冷静で理性的な判断を下すのに、自分の

事となると感情的になり冷静さを欠く。 ㉢

(5) 調・車 行動を起こす事が目的のようになり、時には生産的

ではない行動となる。自分勝手な行動となれば、

周囲の人達と遊離するし、 ㉣

経済的に打算抜きとなる。

人体図②の文章 (6)～(7)

(6) 調・玉 常識のなかの非常識となり、若年で老成風となり、  
博学の世間知らずとなる。精神の葛藤が激しく、㊸  
精神面に強く現実に弱い。

(7) 車・玉 文武両道の士となる。

理性に合う行動、行動にかなう理性となり、高い人格を  
形成する。

＊ 金正日 (キム・ジョンイル) 1942-2-16

陰占 ⇒ 年干支「壬午」月干支「壬寅」日干支「庚子」です。

アンダーラインでくくってしまった ㊸ ㊹ ㊺ の文章が ……

人体図②の文章 (1)～(5) と 人体図②の文章 (6)～(7) です。

(1) 鳳・鳳 と (2) 鳳・調 ㊸でくくった箇所を3つ合わせると……おおらかでのんびりした性質を外面にもっている反面、内面には繊細な感情と孤独性や反発性をもっている。それゆえ、時として鋭い神経を出します。  
このような文章にすると、わかりやすいとおもいます。

つぎは (4) 鳳・玉 感情表現③、あるいは、自分の事になると感情的、冷静さを欠く、……精神の葛藤が激しいですよ。という部分。

3つまとめて、③の部分として、このような1つの文章にするとよろしいとおもいます。

③の箇所をまとめると、アンダーラインが引かれている意味合いになると思います。

おわかりになりましたでしょうか……。

③④⑤のここまでが〔一応性格の特徴と呼べるところ〕です。

そして〔一応性格の特徴と呼べるところ〕③ ④ ⑤の箇所を統合した文章が、40頁⇒「二星相関変化法まとめ」になります。

見た目は……おおらかでのんびりした質を外面に持っているけど、内面には繊細な感情と、孤独性や反発性を持つから、時に鋭い神経を出す人です。

このようにして……まずは特徴をつかむと、性格判断はしやすいはずですよ。

あと残りの3行ほど、(6)調・玉 博学の世間しらず……、  
このところは、(A)(B)(C)のなかで、くくらなかつた部分を、  
簡潔に付け足したわけです。

このようにすると、割と上手な性格判断ができます。

ただし、一応頭に入れて置かなくてはいけないのは……  
どの人体図でも、あるいは、どのような星の組み合わせ  
でも、〔これが良い組み合わせ〕とか〔これは悪い組み合  
わせ〕とか、そのような組み合わせは、もともとないの  
です。

どの組み合わせであっても、その星を真っ当に生かせれ  
ば、それなりに見事な人物になると考えます。

どのような星の組み合わせであっても、それを“きちん”  
と活かすことができなければ、運勢も、人間的にも、あま  
り伸びないことになってしまうわけです。

この人物のなかに、車騎・玉堂の組み合わせがあります。  
文武両道の士となるとありますよね。

「文武二道を鍛えることで、理性と行動が一致した高い  
人格を形成できる」と書いてありますが、車騎と玉堂の

両方をもっている、文武二道を〔鍛えている〕〔鍛えていない〕そのどちらかによって、人間的にまったく異なる人物になっていきます。

そうしますと、この人物は両方を鍛えているのでしょうか……？

この人物は、北朝鮮の軍隊経験が全くないそうです。

北朝鮮の初代指導者・<sup>キムイルソン</sup>金日成の息子は北朝鮮の跡継ぎということで、軍隊には1度も入ったことがない、鍛えたこともない、見た感じも、武のほうは苦手でしょう。

実際に鍛えていないのなら、「理性と行動が一致した高い人格を形成できる」とは、なれないわけです。

むしろ、片方でも欠けたら、片寄った人間になります。このように考えていくわけです。

おなじ星をもっている、すごく立派な人格の人もいれば、そうではない人も出てくるわけです。

その人生模様は……<sup>じんせいもよう</sup>実際に星を磨いて<sup>い</sup>生かしているのか、実際に星をどのよう<sup>い</sup>に活かしているのかによるわけです。

☞ 少し難しいところですが、人体図はつぎのように観ていくこととなります。

人体図（1）

	鳳閣星	
調舒星	車騎星	玉堂星
	鳳閣星	

人体図を五行に書き直しました。

人体図（2）

	火	
火	金	水
	火	

鳳閣星は火性の星で2星あります。調舒星も火性の星です。車騎星は金性の星です。玉堂星は水の星ですから水性です。

	火	
火	金	水
	火	

自分自身

（Note: A dotted line points from the text "自分自身" to the circled "金" in the table above.)

人体図（3）

そうしますと、真ん中が金性で、その金性は自分自身です。

真ん中は主星の場所です。「主星はその人物の本質」です。

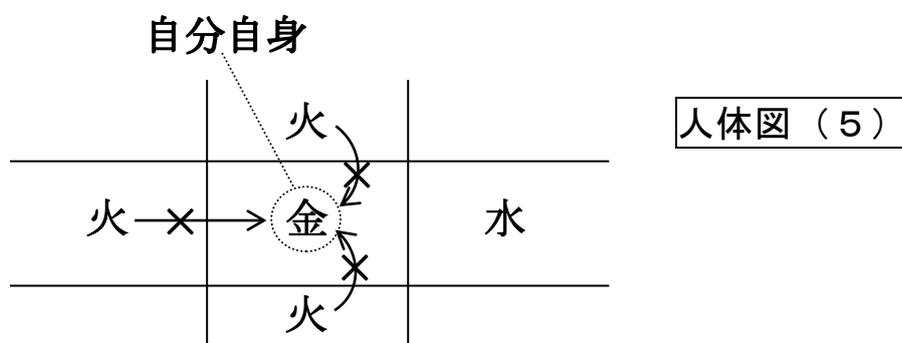
『真ん中の主星の星に、自分自身を当て嵌<sup>は</sup>めて、人体図では占いをしていくようになります』

もう少し勉強が進むと、この観方が改めて出てきます。少し難しいところもあるかとおもいますが、こういうふうに占っていくのだと想って、星を<sup>よ</sup>読んでください。

この人物は真ん中が金性で『自分自身』です。

そうしますと、人体図のなかで金性はどのような状況に置かれているのか……ということを考えます。

この金性『自分自身』は、どんな状況にあるのでしょうか？



自分のまわりはすべて火です。火に囲まれている金性ですから、(火→×金) (火→×金) (火→×金) とまわりの三方

から、火に剋くされています。（金性はものにたとえて鉄・金物）

火炎は金性を溶かしてしまふことができます。

火は金をやっつけてしまふことができます。

三方から剋くされる姿（三方から自分が相剋されている姿）は、この人体図の大きな特徴になります。このように三方以上から、自分が剋くされている人体図は珍しいといえます。

・主星（自分）が三方から相剋されている

主星の金性が（火→×金）（火→×金）（火→×金）と、三方からメタメタにやっつけられている。ともいえます。

主星は自分自身の場所です。自分の本質です。

その主星がまわりから、袋叩きに遭っていますから、精神不安定な人になっていきます。

・精神不安定な人　　そのように占います。

そして……つぎのようにもいえます。

主星がまわりから相剋されている姿というのは、主星だけが孤立している状態です。

火に囲まれて孤立している金性です。

- ・ 主星がまわりから孤立している



- ・ 精神的に孤独な人



- ・ まわりに心を許さない

精神的にとっても孤独な人といえますし、自分もまわりに対して、心をゆるめない。

常に心を引き締め、部下にも心を開かない。

こういう人物になっていきます。

自分は金性で、自分のまわりは3つも火が燃えているわけですから、まわりの炎に心を許せません。

この人は側近に対しても、国民に対しても、外国に対しても、余程の事がない限り、心を許さないといえます。

しかし、この性質が必ずしも悪いとは決まっていません。

“孤立”していますが、<sup>ここう</sup> <sup>ひと</sup>孤高の人ともいえます。

- ・ 孤高の人 [ひとりほかにぬきんでて高い境地の人]

このような人体図の人は、よくいえば、ひとりだけ超然として、世俗せぞくにこだわらない、かけ離れた人物ともいえるわけです。

参考：かけ離れる〔遠くへだたって離れる〕      参考：世俗〔世のならわし〕

真ん中が金性で、炎に囲まれている姿ですから、まわりとは全然違う性質なわけです。

孤立しているわけですが、“あの人物は気高くて普通の人じゃありませんよ」そのようにも周囲から見られる。

そのように想おもわせる質をもっています。

「将軍様と崇あがめられ、手が届かない人」そのように想わせることが出来る人でもあるのです。

それゆえ、このような人体図は孤高の人にもなれます。

しかしそれが〔よくでるのか……〕〔悪くでるのか……〕

という話にもなってきます。      参考：崇める〔尊いものとして扱う〕

〔悪く出れば〕 どういう人物になると想おもえますか……？

この人物は独ひとりだけ周囲と孤立しています。

（火→×金）（火→×金）（火→×金） と、あっちからも、

こっちからも討うたれています。

“自分ほまわりとは違ふ” そのように言っている人体図ですが、悪くでると周囲に反発します。

・ 悪くでれば、まわりに反発する



反社会的

自分を囲むまわりと合い入れない（両立しない）状態です。

それゆえ、悪く出れば、世の中に反発する人、反社会的な人間になります。

もっと強くエスカレートすれば、世界に反発する人物にもなります。こういう人物が北朝鮮の国家元首です。

北朝鮮の將軍様だったのです。

このような人体図をもつ人物が、国家元首に就くと……国そのものが、それに応じた国になっていきます。

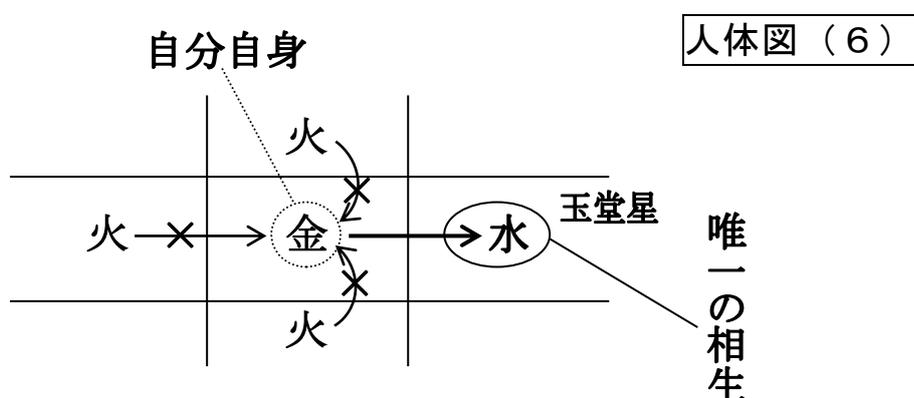
⇒ 算命学ではつぎのように考えています。

北朝鮮はこの人物が国家元首に就任してから、精神不安定な国になりました。周囲から孤立している国になります。

精神的に孤独な国です。まわりに心を許さない国です。

〔よくであれば……〕 特出した孤高の国ともいえますし、  
 〔悪くであれば……〕 まわりに反発する、反社会的な国、  
 そのようにもいえるわけです。

☞ 人体図に 1 つだけ水があります。



ただひとつだけ（金→水）と「相生」になる星は第三命星の〔玉堂星〕です。

（火→×金）（火→×金）（火→×金）と、3つの<sup>かえん</sup>火炎から相剋されている状況ですが…… 1つだけが（金→水）と相生になります。

そうしますと、「二星相関変化法」で……「相生」はどのような現象を起こすのでしょうか。

**規則《4》「相生」** 静的現象〔星同士が相生になると静的現象〕

☞ 36回目【二星相関変化法①】 10 と 15 頁を参照ください。

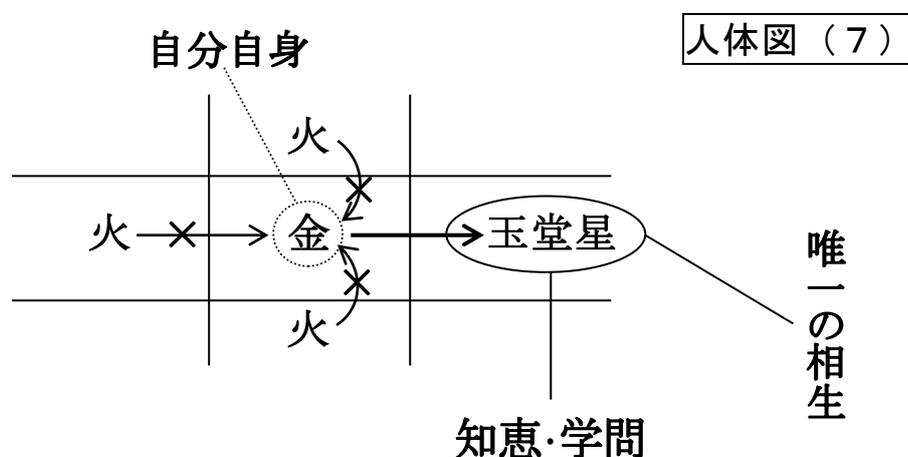
静的現象ですから、心が落ち着くのです。

(火→×金)の相剋は、星のぶつかり合いであり、激しい感情になりますけど、「相生」がありますから〔玉堂星〕のうごきによっては、心・気持ちが収まります。

他者への感情の<sup>たか</sup>昂ぶりが<sup>おさ</sup>納まるわけです。

そうしますと、この人物が〔玉堂星〕を<sup>い</sup>生かしているときだけは、心が落ち着くといえるのです。

玉堂星が光り輝けば安定します。

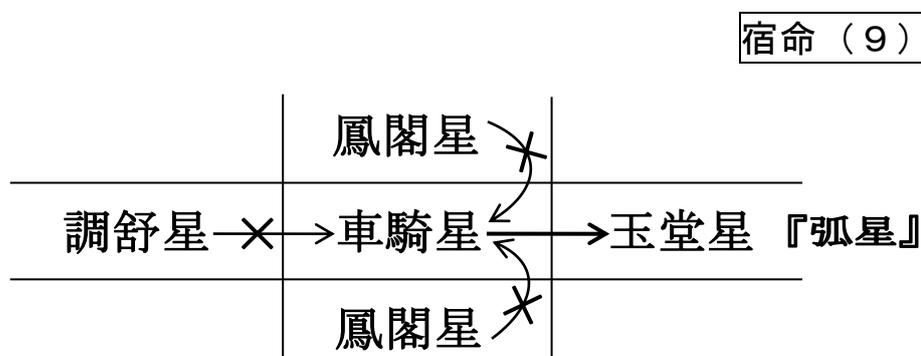
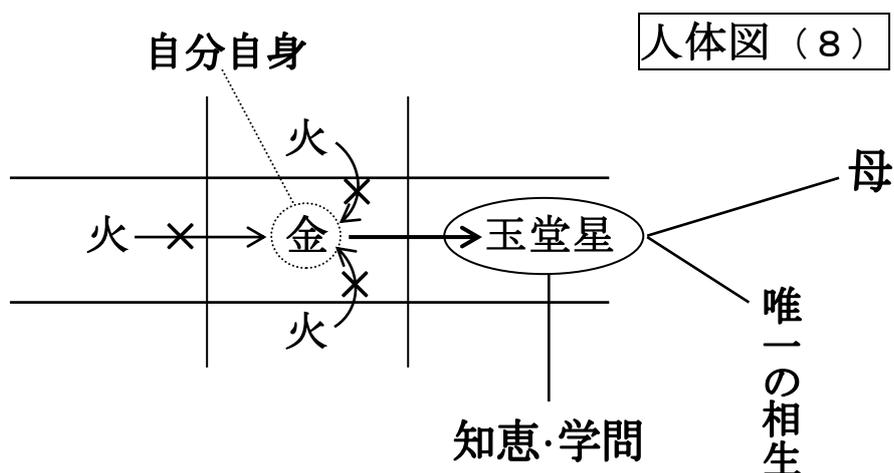


玉堂星は知恵の星・学問の星ですから、興味のある学問、あるいは、自分が好きな趣味……この人物は映画がすごく好きだということです。(韓国の映画監督を拉致して映画を作らせたそうです) 学問に限らず、好きなことをやっているときは心が落ち着く……そのように考えます。

☞ いくぶん難しいとは思いますが、人体図を観ますと第三命星の玉堂星が唯一の「相生」になっています。

ここでの玉堂星は『孤星』<sup>こせい</sup>といいまして、彼の人体図で焦点になる星です。

唯一〔穏やかな気持ち〕〔落ち着いた心〕それを得られる<sup>かなめ</sup>要になる星が玉堂星です。



(火→×金) (火→×金) (火→×金) そして (金→水) です。

玉堂星だけが「相生」になっています。この姿を『孤星』とといいます。

第三命星の玉堂星を人物でいえば……誰になりますか？

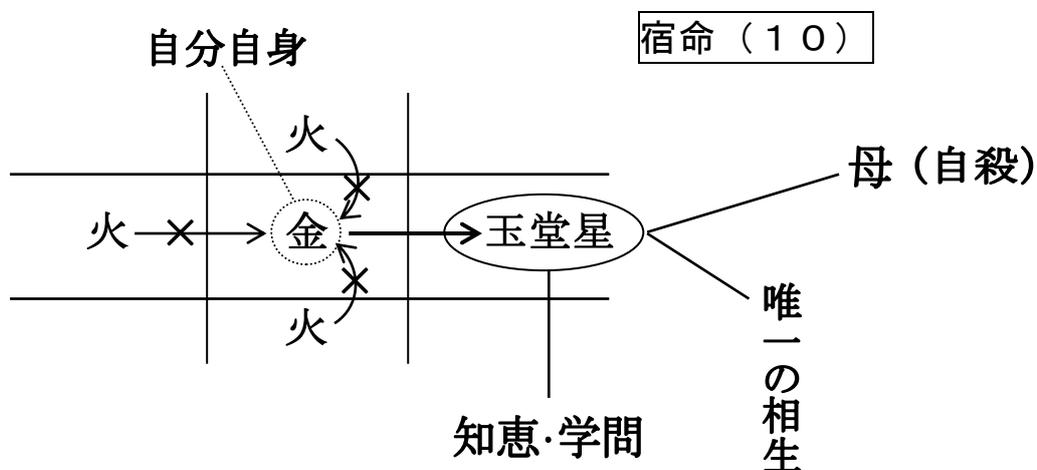
玉堂星は知恵・学問の星ですが、人物になおすと母親です。玉堂星は実母の星です。〔龍高星は育ての母です〕

先ほど玉星堂は知恵・学問の星なので、興味のある学問をやっているときは、心が穏やかになりますよ…といいましたが、それとおなじことを人物でもいえるのです。ただし「母親が生きていて、しっかりしていればです」

母親が愛情をもって慈<sup>いつく</sup>しんでいれば、この人物の心が落ち着きます。安定します。

精神不安定も解消されます。

ところが……彼が子供の頃に、母親は他界しています。



母親は自殺したといわれていますが〔真実是不明〕です。

その後、後妻が来て、腹違いの兄弟が何人もいます。  
腹違いの兄弟とは、非常に仲が悪かったとのこと。

この人物の宿命で〔たった1つの精神のよりどころ〕であった母親が早死にしているということは、精神不安定な人間になります。

母親がいないことで、とても孤独で反社会的な質をもつ人物になると考えられます。

母親が必要な人体図です。

このような人体図の人物であっても、母親の存在があり、その母が愛で慈<sup>いっく</sup>しむ育て方をしてくれれば、まっとうな人間に育ちます。

【初年】 37回目【二星相関変化法②】 **最終回です**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 38回目【陰占宿命 いんせんしゆくめい】です。